松山鏡

楠山正雄

青空文庫

一

むかし越後国松の山家の片田舎に、おとうさんとおかあさんと娘と、おやこ三人住んでいるうちがありました。

ある時おとうさんは、よんどころない用事が出来て、京都へ上ることになりました。昔のことで、越後から都へ上るといえば、幾日も、幾日も旅を重ねて、いくつとなく山坂を越えて行かなければなりません。ですから立って行くおとうさんも、あとに残るおかあさんも心配でなりません。それで支度が出来て、これから立とうというとき、おとうさんはおかあさんに、

「しっかり留守を頼むよ。それから子供に気をつけてね。」

といいました。おかあさんも、

「大丈夫、しっかりお留守居をいたしますから、気をつけて、ぶじに早くお帰りなさいまし。」

といいました。

その中で娘はまだ子供でしたから、ついそこらへ出かけて、じきにおとうさんが帰って来るもののように思って、悲しそうな顔もしずに、

「おとうさん、おとなしくお留守番をしますから、おみやげを買ってきて下さいな。」

といいました。おとうさんは笑いながら、

「よしよし。その代わり、おとなしく、おかあさんのいうことを聴くのだよ。」

といいました。

おとうさんが立って行ってしまうと、うちの中は急に寂しくなりました。はじめの一日や二日は、娘もおかあさんのお仕事をしているそばでおとなしく遊んでおりましたが、三日四日となると、そろそろおとうさんがこいしくなりました。

「おとうさん、いつお帰りになるのでしょうね。」

「まだ、たんと寝なければお帰りにはなりませんよ。」

「おかあさん、京都ってそんなに遠い所なの。」

「ええ、ええ、もうこれから百里の余もあって、行くだけに十日あまりかかって、帰りにもやはりそれだけかかるのですからね。」

「まあ、ずいぶん待ちどおしいのね。おとうさん、どんなおみやげを買っていらっしゃるでしょう。」

「それはきっといいものですよ。楽しみにして待っておいでなさい。」

そんなことをいいいい、毎日暮らしているうちに、十日たち、二十日たち、もうかれこれ一月あまりの月日がたちました。

「もうたんと、ずいぶん飽きるほど寝たのに、まだおとうさんはお帰りにならないの。」

と、娘は待ち切れなくなって、悲しそうにいいました。

おかあさんは指を折って日を数えながら、

「ああ、もうそろそろお帰りになる時分ですよ。いつお帰りになるか知れないから、今のうちにおへやのおそうじをして、そこらをきれいにしておきましょう。」

こういって散らかったおへやの中を片づけはじめますと、娘も小さなほうきを持って、お庭をはいたりしました。

するとその日の夕方、おとうさんは荷物をしょって、

「ああ、疲れた、疲れた。」

といいながら、帰って来ました。その声を聞くと、娘はあわててとび出して来て、

「おとうさん、お帰りなさい。」

といいました。おかあさんもうれしそうに、

「まあ、お早いお帰りでしたね。」

といいながら、背中の荷物を手伝って下ろしました。娘はきっとこの中にいいおみやげが入っているのだろうと思って、にこにこしながら、おかあさんのお手伝いをして、荷物を奥まで運んで行きました。そのあとから、おとうさんは脚絆のほこりをはたきながら、

「ずいぶん寂しかったろう。べつに変わったことはなかったか。」

といいいい奥へ通りました。

おとうさんはやっと座って、お茶を一杯のむ暇もないうちに、包みの中から細長い箱を出して、にこにこしながら、

「さあ、お約束のおみやげだよ。」

といって、娘に渡しました。娘は急にとろけそうな顔になって、

「おとうさん、ありがとう。」

といいながら、箱をあけますと、中からかわいらしいお人形さんやおもちゃが、たんと出てきました。娘はだいじそうにそれを抱えて、

「うれしい、うれしい。」

といって、はね回っていました。するとおとうさんは、また一つ平たい箱を出して、

「これはお前のおみやげだ。」

といって、おかあさんに渡しました。おかあさんも、

「おや、それはどうも。」

といいながら、開けてみますと、中には金でこしらえた、まるい平たいものが入っていました。

おかあさんはそれが何にするものだか分からないので、うらを返したり、おもてを見たり、ふしぎそうな顔ばかりしていますので、おとうさんは笑い出して、

「お前、それは鏡といって、都へ行かなければ無いものだよ。ほら、こうして見てごらん、顔がうつるから。」

といって、鏡のおもてをおかあさんの顔にさし向けました。おかあさんはその時鏡の上にうつった自分の顔をしげしげとながめて、

「まあ、まあ。」

といっていました。

二

それから幾年かたちました。娘もだんだん大きくなりました。ちょうど十五になった時、おかあさんはふと病気になって、どっと寝込んでしまいました。

おとうさんは心配して、お医者にみてもらいましたが、なかなかよくなりません。娘は夜も昼もおかあさんのまくら元につきっきりで、ろくろく眠る暇もなく、一生懸命にかんびょうしましたが、病気はだんだん重るばかりで、もう今日明日がむずかしいというまでになりました。

その夕方、おかあさんは娘をそばに呼び寄せて、やせこけた手で、娘の手をじっと握りながら、

「長い間、お前も親切に世話をしておくれだったが、わたしはもう長いことはありません。わたしが亡くなったら、お前、わたしの代わりになって、おとうさんをだいじにして上げて下さい。」

といいました。娘は何ということもできなくって、目にいっぱい涙をためたまま、うつむいていました。

その時おかあさんはまくらの下から鏡を出して、

「これはいつぞやおとうさんから頂いて、だいじにしている鏡です。この中にはわたしの魂が込めてあるのだから、この後いつでもおかあさんの顔が見たくなったら、出してごらんなさい。」

といって鏡を渡しました。

それから間もなく、おかあさんはとうとう息を引き取りました。あとに取り残された娘は、悲しい心をおさえて、おとうさんの手助けをして、おとむらいの世話をまめまめしくしました。

おとむらいがすんでしまうと、急にうちの中がひっそりして、じっとしていると、寂しさがこみ上げてくるようでした。娘はたまらなくなって、

「ああ、おかあさんに会いたい。」

と独り言をいいましたが、ふとあの時おかあさんにいわれたことを思い出して、鏡を出してみました。

「ほんとうにおかあさんが会いに来て下さるかしら。」

娘はこういいながら、鏡の中をのぞきました。するとどうでしょう、鏡の向こうにはおかあさんが、それはずっと若い美しい顔で、にっこり笑っていらっしゃいました。娘はぼうっとしたようになって、

「あら、おかあさん。」

と呼びかけました。そしていつまでもいつまでも、顔を鏡に押しつけてのぞき込んでいました。

三

その後おとうさんは人にすすめられて、二度めのおかあさんをもらいました。

おとうさんは娘に、

「こんどのおかあさんもいいおかあさんだから、亡くなったおかあさんと同じように、だいじにして、いうことを聴くのだよ。」

といいました。

娘はおとなしくおとうさんのいうことを聴いて、

「おかあさん、おかあさん。」

といって慕いますと、こんどのおかあさんも、先のおかあさんのように、娘をよくかわいがりました。おとうさんはそれを見て、よろこんでいました。

それでも娘はやはり時々、先のおかあさんがこいしくなりました。そういう時、いつもそっと一間に入って、れいの鏡を出してのぞきますと、鏡の中にはそのたんびにおかあさんが現れて、

「おや、お前、おかあさんはこのとおり達者ですよ。」

というように、にっこり笑いかけました。

こんどのおかあさんは、時々娘が悲しそうな顔をしているのを見つけて心配しました。そしてそういう時、いつも一間に入り込んで、いつまでも出てこないのを知って、よけい心配になりました。そう思って娘に聴いても、

「いいえ、何でもありません。」
と答えるだけでした。でもおかあさんは、何だか娘が自分にかくしていることがあるように疑って、だんだん娘がにくらしくなりました。それである時おとうさんにその話をしました。おとうさんもふしぎがって、
「よしよし、こんどおれが見てやろう。」
といって、ある日そっと娘の後から一間に入って行きました。そして娘が一心に鏡の中に見入っているうしろから、出し抜けに、
「お前、何をしている。」
と声をかけました。娘はびっくりして、思わずふるえました。そして真っ赤な顔をしながら、あわてて鏡をかくしました。おとうさんはふきげんな顔をして、
「何だ、かくしたものは。出してお見せ。」
といいました。娘は困ったような顔をして、こわごわ鏡を出しました。おとうさんはそれを見て、
「何だ。これはいつか死んだおかあさんにわたしの買ってやった鏡じゃないか。どうしてこんなものをながめているのだ。」
といいました。
すると娘は、こうしておかあさんにお目にかかっているのだといいました。そしておかあさんは死んでも、やはりこの鏡の中にいらしって、いつでも会いたい時には、これを見れば会えるといって、この鏡をおかあさんが下さったのだと話しました。おとうさんはいよいよふしぎに思って、
「どれ、お見せ。」
といいながら、娘のうしろからのぞきますと、そこには若い時のおかあさんそっくりの娘の顔がうつりました。
「ああ、それはお前の姿だよ。お前は小さい時からおかあさんによく似ていたから、おかあさんはちっとでもお前の心を慰めるために、そうおっしゃったのだ。お前は自分の姿をおかあさんだと思って、これまでながめてよろこんでいたのだよ。」
こうおとうさんはいいながら、しおらしい娘の心がかわいそうになりました。
するとその時まで次の間で様子を見ていた、こんどのおかあさんが入って来て、娘の手を固く握りしめながら、
「これですっかり分かりました。何というやさしい心でしょう。それを疑ったのはすまなかった。」
といいながら、涙をこぼしました。娘はうつむきながら、小声で、
「おとうさんにも、おかあさんにも、よけいな御心配をかけてすみませんでした。」
といいました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
2004年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松山鏡

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/